



南の光明

The Catholic Diocese of Naha Newsletter

今年の教区の目標
 求めよう、神のちむがなさを！
 守ろう、沖縄における人権を！
 探そう、真の平和への道を！

〒902-0067 那覇市安里3-7-2
 カトリック那覇教区本部
 TEL.098-863-2020 FAX.098-863-8474
 発行人 W.F.バートン司教 1部40円
<http://www.naha.catholic.jp/>

(1) 2019年10月1日 (毎月1日発行) カトリック那覇教区報 MINAMI NO KŌMYŌ 第731号 (10月号)

『福音宣教のための特別月間』によせて

カトリック那覇教区長 ウェイン・バートン司教



ご承知のように、毎年、十月の最後から二番目の日曜日は「世界宣教の日」として、全世界のカトリック教会で祈念される日です。今年の「世界宣教の日」は十月二十日(年間第二十九主日)になります。

ところで、教皇フランシスコは、この「世界宣教の日」を含む本年十月を『福音宣教のための特別月間』と定められ、福音宣教への新たな熱意を教会内に生み出すようにと、世界の教会に向けて呼びかけられました。

そして、この教皇様の呼びかけに応じて日本の司教団は、三月十七日に、「ともに喜びをもって福音を伝える教会へ『福音宣教のための特別月間』に向けての司教団の呼びかけ」というメッセージを発表しました。

こうしたことを受けて、わたしたち那覇教区では、特別な行事は行いませんが、すでにある様々

な取り組みの機会を十分に活用して、世界の教会と心を合わせていきたいと思い、ここにいくつかの提案をいたします。これを参考に、各小教区単位で福音宣教特別月間に取り組んで頂きたいと思っています。

各小教区での取り組み例：
 ・ 十月中の主日のミサ後、「ともに喜びをもって福音を伝えるための祈り」を唱える。
 ・ 聖体賛美式で「主にささげる二十四時間」を行う。
 ・ 十月中の主日のミサ後、福音宣教について信徒共同体のグループで分かち合い、すべての信者が福音宣教への意識を高める。
 ・ 司祭は十月中の主日のミサで福音宣教をテーマとする説教をする。
 ・ 教会を訪れる信者でない人々に声をかけ、信頼関係を築き、共同体の交わりに招き入れる。
 ・ 福音の喜びを味わい、その解放を謳歌し、感謝と賛美の生活を

に迎える準備としても、この十月の「福音宣教のための特別月間」を、豊かに過ごして参りましょう。

キリストの救いの喜びが新たな熱意、手段、表現をもって伝わるよう、私たちが聖霊によって強めてくださるよう、聖母マリアと諸聖人の取次によって願います。

ともに喜びをもって福音を伝えるための祈り

喜びの源である神よ、あなたは、御子キリストを遣わし、その受難と復活を通して、救いに導く喜びの福音をこの世にもたらしてくださいました。

また、あなたは、キリストの後に従う働き手を通して、諸国の民に福音を告げ知らせ、どんな逆境にあっても、キリストを信じる人々の喜びを支えてくださいました。

さまざまな困難に直面している現代社会の中で、

もって喜びを伝える。
 なお、十一月に教皇様を日本に迎える準備としても、この十月の「福音宣教のための特別月間」を、豊かに過ごして参りましょう。

人々の救いに奉仕する教会を顧みてください。
 キリストの救いの喜びを新たな熱意、手段、表現をもって伝えることができるよう、わたしたちを聖霊によって強めてください。

わたしたちの主イエス・キリストによって。アーメン。
 (日本カトリック司教協議会)

ローマ教皇、38年ぶり来日決定。
 東京・広島・長崎
 11月23日(土)～26日(火)

教皇ミサ 応募受付中

来日テーマ
 『すべてのいのちを守るため』
 PROTECT ALL LIFE

MISSION: A GIFT FROM THE TRINITARIAN GOD

Mission is a gift from God. It comes from the Father, Son and Holy Spirit. It is Trinitarian by origin.

The Father sends His Son to humanity, “This is my Beloved Son, with whom I am well pleased” (cf. Mt.3:17), and the Holy Spirit linked the relationship between the Father and the Son.

Therefore, mission is relational.

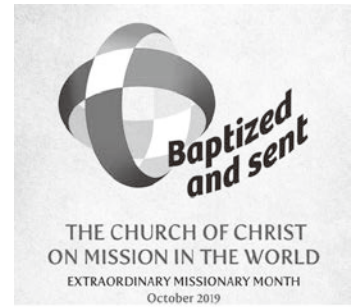
Since mission is a gift from God, relational and Trinitarian in origin, then we are challenged to share this gift to our brothers and sisters. It is our task to proclaim God’s love and goodness in our encounter with them. In other words, our witnessing matters most as we engaged in God’s mission. This requires a sincere conversion of our heart; a change of one’s self to become a bearer of God’s love.

Missio Ad Gentes in Second Vatican Council called us to proclaim to all peoples, “Go therefore, and make disciples to all nations, baptizing them in the name of the Father and of the Son and of the Holy Spirit” (cf. Mt.28:19), but without a conversion of one’s heart we can never attain this dream. To experience an authentic dialogue and personal encounter with the people, we have to transform ourselves according to the person of Jesus Christ who is meek and humble of heart.

Pope Francis has reminded us in *Evangelii Gaudium* #27, “I dream of a ‘missionary option’, that is, a missionary impulse capable of transforming everything, so that the Church’s customs, ways of doing things, times and schedules, language and structures can be suitably channelled for the evangelization of today’s world rather than her self-preservation.” Yes, indeed this missionary impulse is what we need as missionary disciples, so that we may carry with enthusiasm God’s mission that is being entrusted to us.

It is in “prayer, reflection and action will help us to live this dimension of the Extraordinary Missionary Month...”, (cf. part Pope Francis’ message on the theme of this month). Therefore, to have a deep communion with Lord is a challenge for all of us, so that our words and actions are not far from the will of God. My journey here has started and my heart is full of hope to become a sharer in doing God’s mission in the Diocese. It is my fervent prayer that I may be formed into the heart of Christ, that is, willing to sacrifice for the sake of His mission even in the most difficult times that I will be encountering along the way. It is only by the grace of God that I may be able to attain all these dreams as I remain to be open in His plan for me through the guidance of the Holy Spirit and our dear Blessed Virgin Mary. With a joyful heart in this Extraordinary Missionary Month, let us join in prayer all our aspirations, that as baptized Christians we may go out to the whole world and proclaim the Crucified and Risen Christ to our brothers and sisters. Let our encounter with one another an avenue to share the story of Jesus as our model of the missions and exemplar of deep faith.

by: Sr. Ivy B. Bayno, OND



Prayer for the Extraordinary Mission Month

(An excerpt from the Article, Baptized and Sent, page 411)

Heavenly Father, when your only begotten Son Jesus Christ rose from the dead, he commissioned his followers to “go and make disciples of all nations” and you remind us that though our baptism we are made sharers in the mission of the Church.

Empower us by the gifts of the Holy Spirit to be courageous and zealous in the bearing witness to the Gospel, so that the mission entrusted to the Church, which is still very far from completion, may find new by efficacious expressions that bring life and light to the world.

Help us to make it possible for all people to experience the saving love and mercy of Jesus Christ, who lives and reigns with you in the unity of the Holy Spirit, One God, forever and ever. Amen.

Book カトリック文化センターからお知らせ

2020年カレンダー、手帳の店頭販売開始

今年もそろそろ、来年のカレンダー、手帳を準備する時季となりました。クリスマス向けの商品や絵本も多数揃え、皆様のご来店を心よりお待ちしております。書籍や信心用具などの販売や注文も承っております。是非、ご利用下さい。

◎キリスト教関係の書籍、宗教用品等のご用命は、「カトリック文化センター」を通してご注文下さるようお願いしております。
〒900-0005 那覇市天久 1-8-7 電話・Fax 098-868-4649



いつまでも残るものは…

アジット・ロドリゲス神父
石川教会 主任司祭



に成功を収め称賛されていてもいつかそのポジションを失うことがあります。また、私たちは、確実に年を重ねています。

年を取るといふことは、失うことを意味します。体力を失う、聴力や視力を失う、熱意や夢を失う、愛する伴侶や友を失う、そして最後には自分の命を失う…。

以上、この失う恐怖は、誰にでも襲ってくるものなのです。

失うことに恐れと不安を感じる私たちですが、聖書に書かれているいつまでも残るものを持つことができるのです。それは信仰と希望と愛です。

信仰とは、信頼できるもの、信頼に足るものことです。私たちが椅子に座る時、ほとんどの場合、リラックスできます。それは、この椅子は壊れないと信頼しているからです。もし、この椅子は壊れるかもしれないと思っていたら、座っていてもリラックスはできな

ないでしょう。

神様は、この天地を創造し、人間ひとりひとりを目的をもって個性的に創造されました。この神様がなさることに、間違いはなく、全てのことには意味があり、私たちを愛し、導いておられます。人生において予期せぬ出来事が起つたり、何故かと思う時がありませんか。しかし、失ってしまうことがあっても、信頼できるような神様を知っているなら、心は穏やかになるでしょう。信頼するものによってリラックスできる空間が私たちを恐れから解放してくれるのです。

希望も、また失う恐れに対して有効なものです。病院で看護師が「早く元気になりましょうね」と患者さんを励ましたところ、その方は、こう答えたというのです。「私は退院しても家族はいないんです」「退院しても仕事がないんです」。この方に必要なのは、良い薬や優れた治療でしょう。しかし、最も必要なものは、「希望」ではないでしょうか。

聖書には、人生の終わりに天国があることが記されています。もし、そのゴールが明確に分かっていけば、例えば、今が暗くても、雨が降っても、この道はあの明るい町、天国に繋がっていると分かっているなら、恐れはなくなるのではないのでしょうか。例えば、失うもの

があっても、天国という失うことがない希望があるのです。

神の子イエスキリストは、私たちの罪の身代わりとなるために人の姿をとって、この世に降ってこられました。その生涯において何一つ悪いことはなさいませんでした。しかし、十字架で罰を受けられて、血を流し、死なれました。彼は悪いことはしませんでした。彼は自分の罪のために死んだのではなく、あなたのため、あなたのために、身代わりとなって死なれたのです。しかし、キリストは三日目に死からよみがえり、今も生きておられます。

このことを信じる時に、私たちの罪はゆるされ、永遠の天国に入ることができるといふ、いつまでも残る希望を持つことができます。この世の命はいつか失われます。今、暗い道や雨が降っている時かもしれません。しかし、ゴールが分かっているなら幸いであり、失う恐れから解放されるのではないのでしょうか。

最後にも、失うものがあっても、いつまでも残る愛があります。人は、誰も愛されたいと思うもので、認められていたのです。しかし、これだけの稼ぎがある、これだけの人脈がある、これだけの能力や経歴があると自分にあるもので認められているなら、それを失うことの不安、失った時の絶望感

破壊的となるでしょう。

失わないようにと努力することは大切なことです。しかし、それと同じ程度に、いやそれ以上にいつまでも残るものを持つておくことが大切です。

「愛は寛容であり、親切です。愛は決して自慢せず、高慢になりません。決して思い上がりなく、自分の利益を求めず、無礼なふるまいをしません。愛は自分のやり方を押し通そうとはしません。また、いら立たず、腹を立てません。人に恨みをいだかず、人から悪いことをされても気にとめません。決して不正を喜ばず、いつも真理を喜びます。愛は、どんな犠牲を払っても誠実を尽くし、すべてを信じ、最善を期待し、すべてを耐え忍びます」
(一コリ十三・4〜7)

神からいただいた賜物や能力は、いつかは尽きます。しかし、愛は永遠に続きます。預言すること、異言で語ること、知識などの賜物は、やがて消え去ります。

いつまでも残るものは信仰と希望と愛です。その中で最もすぐれているものは愛です。
(一コリ十三・13)



那覇教区平和委員会



8月例会の報告 「地上の平和」を実現する人は幸い

那覇教区平和委員会8月例会は25日、共同通信の記者でカトリック信者の中川克史氏を講師としてお迎えした。演題は「地の塩となりたい～記者として、信者として～」。

中川氏が受洗したのは、イラクがクウェートに侵攻して始まった第一次湾岸戦争の年1991年であった。当時、中川氏は大阪支社の社会部の記者をしていた。夜討ち朝駆けの取材活動。時間に追われ、時間を追い、時間に縛られる毎日。30代前半の中川氏は働き盛りで、そのような生活を当たり前のように入力していた。当然、家庭は奥様まかせ。「おむつを取り替えたのは5本の指に満たなかった」と述懐した。家庭は母子家庭状態。

ある日奥様は「私はカトリックになります」と宣言した。彼女はカトリック系の大学を出ているのでカトリックには違和感は無かったが、あまりにも唐突すぎた。とにかく彼女と教会へ行き、初めてごミサにあずかった。あわれみの賛歌の時に涙があふれだして止まらなかったというのだ。「主よ あわれみたまえ」という罪の赦しを嘆願する箇所まで自分がいかに傲慢だったかを思い知らされたというのだ。その話をしながら、ハンカチで目頭を押さえるシーンが二度ほどあった。それからほどなくして親子三人洗礼を受けた。洗礼を受ける前に大阪教区の戦争を止める祈りの集会に参加したことをよく覚えている。

中川氏の沖縄との関りは彼の幼い頃に遡る。復帰前の60年代、医師不足で悩んでいた沖縄へ彼の御尊父が結核の治療のため二回、通算して1年あまり単身赴任したというのだ。彼自身は2013年から3年間、那覇支局長をしていたとのこと。その時はウエイン神父のいる小祿教会の御世話になった。本人はふれなかったが現在カトリック正義と平和協議会で沖縄問題に取り組み、殆ど毎年6月23日には那覇教区の平和巡礼に参加している。

中川氏は番記者もしていたようだ。番記者とは情報を得るために、有力な政治家などに密着して取材する新聞社や放送局の記者のこと。中川氏は小淵恵三付きの所謂小淵番だった。彼によると番記者とは不思議なもので、ライバル会社の記者で構成されるものの、そこに仲間意識が醸成されるようだ。その仲間意識は強烈で、自分の会社の他の番記者ともそこで得た情報を共有しないほどだという。番記者はスクープのチャンスに恵まれるものの、

落とし穴もあるという。権力側に取り込まれ、提灯持ちになり下がり提灯記事を書く羽目になることもあるというのだ。中川氏は小淵恵三の政治的勢いに陰りが見えたころ政治部を離れたという。

中川氏は記者ならではの裏話を披露してくれた。普天間基地返還合意の記者会見が1996年4月12日に当時の橋本龍太郎首相とモンデール駐日米大使のもとで行われた。しかし日本経済新聞はその前日の夕刊でそのことをすっぱ抜いた。いわゆるスクープである。

橋本龍太郎首相本人が耳打ちしたというのが定説になっている。政治家のつねとして喜ばしい事実を大々的に伝え、陰の部分、マイナス面はふせるか、目立たないようにする。この場合は代替地だ。当時嘉手納飛行場統合案が有力だったようだ。当時の官房長官は梶山静六。

その梶山氏と当時の嘉手納町長がその案に強く抵抗したために、日の目をみなかったというのが中川氏の仮説だ。私達たちは嘉手納基地統合案がつぶれたのはアメリカ側の都合すなわちプライド高い空軍は海兵隊と一緒にすることをいやがり、海兵隊は唯一海兵隊独自の基地をもつ特権を失うことに反対したと理解していた。中川氏は言う。首相と官房長官はよく夫婦関係に例えられるが仲の悪い夫婦もいますからねと悪戯っぽく笑った。

中川氏はこの講演をするにあたり、「パーチェム・イン・テリスー地上の平和一」を読み返したという。この回勅はヨハネ23世によって1963年4月11日に発せられた。ベルリンの壁建設から2年後、キューバ危機からほんの数か月後というタイミングだ。またこの回勅はカトリック信者のみならず、「すべての善意の人」に宛てられており、人間個人が有する生存、尊厳、自由、教育といった権利についてふれており、核兵器や軍拡競争を終わらせるための取り組みについて書いている。中川氏は格差社会にふれ、富の公平な配分、最低限の生活の保障をすることにも言及。マタイ福音書のブドウ園の労働者の例えを引用した。

最後に中川氏は云う。「現在自分が記者として、信者としてあるのは妻のお陰だ」と。

(平和委員 稲福捷夫)



那覇教区平和委員会



日 時：10月27日(日) 午後2時～4時

場 所：カトリック真栄原教会

講 師：青山 恵昭 氏 (琉球新報記者)

(台湾2・28事件真実を求める沖縄の会代表世話人)

演 題：「台湾2・28父の失踪を追う～認定賠償請求裁判勝訴確定～」

※場所が安里教会から真栄原教会に変更になっているのでご注意ください!

カトリック那覇教区平和委員会

問い合わせ ☎090-1949-6569 (稲福)



池坊いけばな

椿ちゃんの部屋

沖縄市与儀、

ファミリーマート(サミット比屋根店近く)

日曜日 4時～6時 約1～2時間

月謝:4,000円/3回(花材費別 1,000円程度)

TEL:090-4471-1288 (松田香翠)

2019年9月拡大司祭・助祭会議議事録

開催日時: 2019年9月3日(火) 10:00~12:00 開催場所: 黙想の家

1. 報告及び連絡事項

- ・前回(9月会議)の議事録に沿って石垣助祭が報告と確認。
- ・サマーキャンプ報告: ヨアキム神父より報告された。参加者総数は78名。中高生の2日目に強風雨によりテントが飛ばされる被害を受けたが、ウェイン司教と押川司教、司祭団、修道者、多くの信徒の皆様のご協力により、今年も無事に終わることが出来たことに感謝。反省会では次年度に向けた課題として、二年生は受け入れが困難なこと。三年生以上から申し込むことを徹底することが確認された。
- ・今回のGFCは、宮古島にて初めて開催される。ロドニー神父より10月26日土曜日9:00~ONDのシスターHISOGの講話、10:00~御ミサの案内がなされた。また、その準備のためのノバナミサも三つの小教区とする計画もあり、この行事がフィリピン人に限らず誰でも参加できる行事として開催しているので、多くの兄弟姉妹の参加が呼びかけられた。
- ・10月27日 普天間にて開催される奇跡の主の祝いについて パトリック神父がポスターを配って、説明し、多くのご参加を呼び掛けた。
- ・教皇様の日本訪問について 事務局から説明がなされた。ヴァチカンからの公式発表のない状態ではあるが、マスコミ報道によると11月23日~26日の予定で来日し、教皇ミサ等の催事が予想されるが、かなり差し迫ったイベント発表となるため、その準備として、もしそのようなことがあれば参加の意思があるかどうかなどの心づもりをしておく必要がある。各小教区単位で意向調査などをしておいた方がよいとの意見が出された。
- ・2019年7月27日のカトリック学園研修大会の報告がウェイン司教よりなされた。わたしたちの教区の大切な宣教の場である幼稚園の教職員が一堂に会する研修会なので、教職員との協力体制づくりのためにも司祭、特に幼稚園が属する小教区の司祭が積極的に参加して頂きたい旨要請がなされた。幼稚園の責任を担ってきたシスター方の高齢化が進んでいて、あちこちの幼稚園でその後継者選びが現実の課題になっており、司牧者としての司祭の役割や関与がより重要となっていることが指摘された。
- ・特別宣教月間-2019年10月-についてのブイ神父からの提案書について検討した。話し合いの結果、準備期間が短いことから教区行事としての特別ミサ等の実施は見送り、各小教区で共同祈願や司祭の説教のテーマとして「福音宣教」を取り上げ、日常生活における宣教の意識の高揚や祈りによる宣教支援などを促すための司教からのメッセージを出すこととした。
- ・2019年8月23日に開催された学校法人研修部主催のITやソーシャルメディアについての研修会のデニス神父からの報告がなされた。やはりIT関連機器が子供に及ぼしている影響は計り知れないものがあり、特に重篤な悪影響はサイレントチルドレンとなることにある。会話ができなくなり、人間関係の形成が難しくなり、親との交わりも出来なくなってしまう。いくら忙しくても機械に子供の相手をさせていては、後々大変な問題を抱えさせることになることが指摘された。
- ・2019年日韓邦人修道会総長会議が2019年10月27日~11月1日の期間、安里教会を中心会場として開催されることがマーシーさんより報告された。

2. 審議事項

- ・マーシーさんより2019年度の教区予定表の記載漏れや追加記載等の確認作業が行なわれた。11月24日にもしパパ様が長崎の予定になったら真栄原教会の公式訪問は11月17日に移動になることが伝えられた。
- ・11月29日は中神父の七回忌にあたるがそれに近い前後の主日の予定が埋まっているため、11月17日(日)14:00から安里教会で追悼ミサを行うことが決められた。
- ・教会におけるハラスメントについて ウェイン司教様から説明がなされた。学校法人などはかなり前からこのような宣言をすることが求められていて、すでに宣言文などがある。最近さらに色々なハラスメントへの対応も求められて改定されたが、近年は教会でも同様な問題がクローズアップされる時代となり、それへの対応が求められるようになった。まだ最終決定ではないが別紙の宣言文について意見交換し、さらに信徒の意見も考慮して何らかのハラスメント対策を教区として打ち出すこととした。
- ・各教会の司牧評議会(教会法第573条)と経済問題評議会(同第536条)について司教様のお願いは各小教区に経済委員会を作って主任司祭と共に教会の運営すること。予算計画策定や管理運営はもとより、予算に無い緊急性の高い支出についても必ず委員会で検討し、司教の許可を得ることが確認された。
- ・カテキスタの養成プログラムについては新垣助祭が欠席ため報告はなし。
- ・石垣の拡大司祭・助祭会議について 11月5日15:00~会議、その日は宿泊の予定です。
- ・第2回信徒評議会の予定 2019年9月22日14:00時 開南教会にて開催。
- ・その他: 9月5日は、フェリックス神父とオーバン神父が戦後初めて沖縄の地を踏んだの再宣教の記念日であることが押川司教様から紹介された。3年後の2022年はその75周年にあたるので、特別な記念行事を検討することとした。
- ・次回は10月1日(火) 10:00~12:00安里教区センター行われる。

2019年9月5日

記録: 津波古 聡

承認: ウェイン司教

父が旅立って十五年が過ぎ、今年母を見送った。父の時と同様、母の時も覚悟はしていたものの喪失感は大い。暫くは無力感に襲われるが、すぐにこれが永遠の別れではないのだというように思い至る。またいつの日か天の国で会えるのだ。私達には希望がある。こういう時に信仰があつて良かったとつくづく思う。

振り返れば、これまで仕事の事、健康上の問題、お金の問題等様々な悩みや苦しみがあつたが、いつも意識の底に「神さまが守って下さる」という思いがあつて、乗り越えてこられたと思う。祈りを通して神様が進むべき道を示して下さいような気がする。時には不本意な結果にがっかりすることもあつたが、全ては神さまの思召しであり、意味のある事なのだと思得できる。信仰があるということは本当に幸せなことなのだ。私たちが家族を教会に導いた父と、父を通して大きなお恵みを下さった神さまにいつも感謝している。

父が亡くなった時に後悔したことは、入信の理由を尋ねておけばよかつたということ。長い間銀行員として勤めていた父の超合理主義的な横顔と宗教とが何か結びつかないような気がしていたからだ。母に訊いたら「悲惨な戦争を経験したこともあるだろうが、終戦直後に船乗りをしていた時にハンセン病

患者を隔離するために、無理やり家族から引き剥がして乗船させるのを見て、その悲惨さに無念な思いをしたことも大きいと思う」と答えてくれた。

一方、母の場合は、戦火の中を逃げ回っている時に、いつも一髪で助かり、そういう時には、必ず「早くここから逃げろ」という声が聞こえたり、どうしても足が動かなくなり、一緒に逃げている祖父に怒鳴られたりしつつ、結果進んでいた方向に爆弾が落ち、そのまま走っていたら確実に死んでいたというよ

たて軸よこ軸

父母の遺産

開南教会 宮城真由美

て公教要理を教えて下さったり、お祈りを捧げていた。

私は教会学校で公教要理を教わったが、家でも父がおさらいをしてくれた。他にも祈禱書の主な祈りを暗記させられたものだ。また、当時はラテン語のミサだったので、ラテン語の意味も教わった。余談ながら、この時覚えた文語調の祈りやラテン語は後で古文や外国語の勉強に大いに役立った。

今思い返せば、当時の父は顧客との付き合いで、ゴルフや釣り、ボウリングも仕事のうちで、

うな状況が何度もあつたのとこの世には何か超自然な力が働いているという事を確信していた。そういった素地があつて、父に勧められ公教要理を勉強したものの、どうしても「処女懐胎」が理解できなかつた。結局、悩みに悩んだが、これは受け入れられないと決断したとのこと。

私も、その頃のことをよく覚えていて。週の何日か石神神父（後の司教様）や平野先生が家にいらして近所の大人達も集めて

夜は会計関係や不動産鑑定士の資格取得の勉強と超多忙な時期だったはずなのに本当に有難いことだった。

と。因みにスクールバスは沖繩で第一号だったらしい。

また、開南教会聖堂の新築にも銀行での経験を活かし、有馬神父様をアシストして融資手続きに奔走していた。母にはお祈りの仕方を教わった気がする。

日常の会話の中で、私が、「今日はしくじってしまった。神さまに何と言ってお詫びしよう」と話した時に、「神様に嘘や言い訳は通用しない。素直に謝ればいいんだよ」と言っていた。また、車に当て逃げされて途方に暮れていた時、母は「犯人が自首できるように、相手の良心に訴えかけて下さい」とお祈りしていると言った。これを聞いて私は恥ずかしくなった。今ここに披露するのはもっと恥ずかしいが、私が祈つたのは「犯人が早く捕まりますように。治療費や大破した車の買換えにこちらの保険は使えません。自費では到底賄えません」という何とも幼稚なものだったのだ。母の祈りの中には相手も救われるようにとの願いが込められている。

私はと言えれば自分のことばかり。実際、後日自首してくれた時には事故を起こしてから、怖くて眠れなかつた。死んでしまつたのではないかと新聞を開くのが怖かつた。自首できてほつとした」と話してくれた。そうか、祈るとはこういう事なんだ。人を愛するということ事が前提なんだと遅まきながら悟つた次第。

母はとにかくよく祈っていた。特に晩年は朝起きてから夜寝るまでずっと口ザリ才を離さなかつた。学校時代の友人のため、ご近所さんのため、家族のためにと祈り、自分はお祈りすることしかできないからと言っていた。

さて、私たちの両親は信仰という大きな遺産を遺してくれた。まだまだ未熟ながら私達にも受け継いでものを次の世代に引き継がなければならぬ。幸い両親の孫達も全員洗礼を受けた。ただ、クリスマスとご復活以外は教会に來ない。どうすれば信者としての最低限の義務を果たしてくれるのか、悩みは尽きないが、悲観してはいない。なぜなら、彼らの気持ちは良く分かるからだ。幼児洗礼を受けた者は、一時的に教会を離れる傾向があるが、根っこはしっかりと教会に根付いていると自分の経験から思えるからだ。

子供の頃は半ば強制的に引張つていかれ長じては、未信者の友達と教会の価値観に悩む。それでも自分はカトリックの信者なのだという意識は、しっかりと持っていたからだ。早く教会に戻って欲しいと焦る気持ちもあるが、本人たちがその気にならなければ始まらない。今は彼らのために神に祈りつつ、倒れつ転びつ、よき信者になるべく悪戦苦闘している姿を見せていこうと思つている。

「声」 角笛

高江からの報告

名護教会 伊佐育子

今年四月三日、朝六時。高江ヘリパッド工事入り口にあるはずの座り込みテントが消えた。テーブル、イス、やかん、カセットコンロ、パネル、地図、看板のぼり、トイレにいたるまですべて無くなり、更地になっていった。座り込みを始めて十二年経つテントが闇夜に持ち去られたのである。

テントの設置場所は県道の路側帯にあり、日米の共同使用地のため、国も法的には手を出せない。二〇〇七年から九年間工事は中断していた。しかし、二〇一六年七月、政府は全国から機動隊八〇〇人を高江に集結させ、反対する住民を数と力で排除した。自衛隊のヘリマ

で使ったの暴挙に区民は驚いた。それでも、住民の会は座り込みを続けた。

政府は十二月末までにヘリパッドを完成させ、返還



9月14日、平和委員会からテントのためにカンパした資金が贈られた。

式を行った。しかし、その後ヘリパッド補修や、道路改修工事が続けられている。住民の会は防衛省にテントの持ち去りを抗議した。防衛省職員は「日米地位協定に基づき米軍が施設内、区域内の設定、運営、警護及び管理を行っており、今回の措置も地位協定に基づくもの」との回答。そればかりでなく、「四月二十五日までに撤去しないとまた、米軍が撤去する」という張り紙をしてきた。

七月二日、夜陰に乗じて再びテントは盗まれた。二度目である。防衛省は「米軍の施設区域内であるので許可なく撤去できないのだ」と米軍の代弁までする。国民を守るどころか、差し出してしまふ防衛省の姿を見て、沖縄復帰前の闇に引き戻された。今も日本国憲法は私たちの元にはない現実を思い知らされた。

しかし、絶望の中にも光はあった。高江区、東村議会、沖縄県議会、新たに作られたヘリパッド六か所の使用禁止、そのうち二か所の即時撤去が決議されたのだ。また、その決議を推進しようとする東村村長が誕生するという奇跡も起こった。軍事拡大に反対するグアム、辺野古、伊江、宮古、石垣、与那国、種子島、奄美の住民との連帯も生まれてきた。

教区 NEWS 教会

第二回信徒評議会開催

那覇教区

去る九月二十二日、開南教会において、第二回那覇教区信徒評議会が開催された。今回の評議会には、小教区の代表者の他に、小教区の会計担当者の出席もお願いして、小教区会計について、日頃感じておられる疑問や記載の方法などについて、教区事務局長からの説明を受けながら、質疑応答が行われた。

また、ハラスメント対策について、事務局側からの提案を受け、ハラスメントに限らず、教会における様々な問題に対する問合せや相談窓口が必要ではな

国民が真実を知り、真の平和のために声をあげ、殺し、殺されることのない世界がいつか来ると、信じている。思いもよらないことが起こると信じている。テントの米軍による撤去、これは座り込みを行う意味があることとの証明だと、今も、再びテントを立てなおして、座り込みを続けている。何度、盗まれてもまた立て続ける。



いかとの提言を受け、次回以降も話し合いを継続することが決められた。

教区内十五小教区全てから代表者が集い、様々な意見交換がなされ、教区をどう運営、発展させていくべきかを問う集いが豊かに実を結ぶように祈りたい。(書記・新田選)

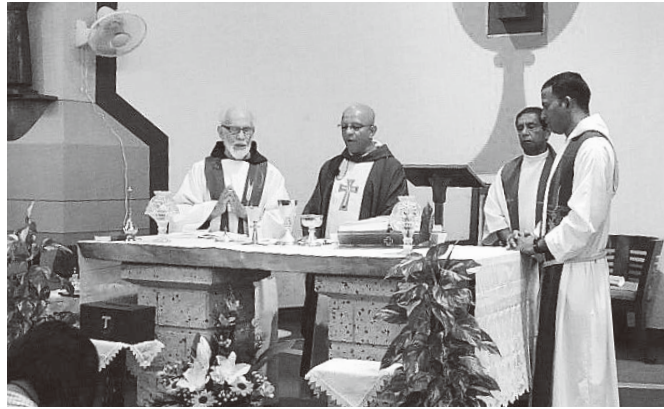
賑わった雨の中の敬老会・月見会

普天間教会

四月に着任した主任司祭ナヴィン神父様の発案で、去った九月十五日に敬老会を兼ねた月見会が賑やかに行われました。日曜のミサを午後五時に、引き続き敬老会・月見会を六時にと、あいにくの雨なので山城会館に会場を移しました。ミサは、与那原教会のクレーバー神父様が主司式をなさり、素晴らしいお話しもなさってくださいました。

折しもパードレ・ピオの集いで普天間にいらしてくださいっていたペトロ神父様、グラントピアノを弾きにいらしてくださいるステイブン神父様(グラントピアノは、会員の小波鮫さんの寄贈)、もちろん主任司祭ナヴィン神父様と、贅沢にも四人の神父様方によるミサをいただきました。その中で七十五歳以上の方々の祝福もあり、感謝感激で神の恵みに心熱い思いでした。

山城記念会館での集いは、伊差川さんの司会のもと、山程のご馳走と笑いで大いに盛り上がりました。知念さん、藤田さんのリードで作ったおいしいご馳走に皆満足し、ご協力くださった方々への感謝を大きな拍手で讃えました。



計 報

◆首里教会

アグネス 仲本 和子 様
二〇一九年九月十六日帰天

享年八十五歳

◆安里教会

エリザベット 上間 恒 様
二〇一九年九月二十四日帰天

享年九十三歳

◆開南教会

フェロミーナ 名護 雪子 様
二〇一九年九月二十六日帰天

享年八十八歳

手で讃えました。

かぎやで風に始まり、ピアノ演奏、オカリナ奏、詩吟、カラオケ、フラダンス、手話ダンス、民舞、お月様を心に描いて全員で月の歌メドレーの合唱、ゲーム等々。外は雨、中はめげずに笑顔と拍手の楽しい集いでした。ご家族連れや他の教会からも参加していただき、大勢の方々も心一つに楽しんでくださいました。

主任司祭ナヴィン神父様は着任早々、会員の信仰を高め、教会の一致を大切に、いろいろと模索し、会員が喜んで取り組めるようアイデアを出し、リードして下さっています。普天間教会の大きな灯になっていただいています。

今回の敬老会。

月見会もまさにその一つで、雨もまた参加者全員を一つにまとめる良い役割をしたと思うと、これもまた神のなさる事、計り知れない事に神に感謝です。

共に、雨にもめげず御参加くださった皆様、御協力くださった皆様（石嶺洋子通信員）に心から感謝。

長崎大司教区
補佐司教
中村倫明師叙階



写真は叙階式を終え、集まった会衆に祝福を与える中村補佐司教。

教皇フランシスコにより今年5月31日に長崎大司教区の補佐司教に任命された、ペトロ中村倫明師の司教叙階式ミサが9月16日(月)午後1時から浦上司教座聖堂で執り行われた。主司式は高見三明大司教(長崎教区)、共同聖別司教は前田万葉枢機卿(大阪教区)と浜口末男司教(大分教区)が務めた。

NPO 法人ぶどう園の会



訪問看護ステーションクララ

TEL&FAX:098-937-5001

住所 沖縄市泡瀬2丁目37-15

- ・基本受付 月曜日～金曜日(申込、相談など)
- ・営業時間 8:30～17:30
- ・営業日 24時間365日(緊急対応含む)

看護師 募集中!

～ご遺族の心をもって奉仕する～
そうてんしゃ

葬 典 社

- *創業30数余年・・・。
 - *皆様に支えられ「感謝」とともに人生を閉じるためのお手伝いをさせていただいております。
 - *ご質問、ご相談、24時間、いつでもお電話下さい。
- 「ゆうなの会」会員募集中です。

ひが たかしげ
(実務担当) 比嘉 高茂

24時間 受付

てんごく
☎098-853-1059



葬祭の
「やすらい企画」

私たちは故人とご遺族の意向を最優先に考えます。何でもご相談下さい。

那覇市首里鳥掘町4-57-3
TEL&FAX:098-885-8205
http://w1.nirai.ne.jp/yasurai
E-mail:yasurai@nirai.ne.jp

24時間 受付